

# I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol. 11

## John Coltrane【ジョン・コルトレーン】

～聖者を目指し、音楽人生を疾走した巨人～



写真提供：ワーナーミュージック・ジャパン

### Profile

1926年9月23日、米ノース・カロライナ州ハムレットで生まれる。本名はジョン・ウィリアム・コルトレーン。10代半ばからアルト・ホーンとクラリネットを吹き始め、地元バンドに参加。高校時代にサクソに転向し、フィラデルフィアの音楽学校でジャズを学ぶ。45年からアルト奏者としてプロとしての音楽活動を開始するが、同年海軍に入隊し46年までハワイ基地の海軍バンドに所属。47年除隊後、48年までエディ・ビンソンのR&Bバンドで活動。49年にディジー・ガレスピー楽団に参加し、初レコーディングを果たす。この頃からテナーに転向。52～53年までアール・ポスティック楽団、53～54年までジョニー・ホッジス楽団に参加。そして、55年にマイルス・デイビス・クインテットに加入。57年にドラッグが原因でマイルスにクビにされ、セロニアス・モンクと共に活動。59年『カインド・オブ・ブルー』に参加のためマイルスのグループに復帰。その後、独自のスタイル“シーツ・オブ・サウンド”を確立するなど、60年に『ジャイアント・ステップス』を発表し、マイルスのグループから正式に脱退。不動の地位を築くと共に、翌61年にマッコイ・タイナー (p)、ジミー・ギャリソン (b)、エルビン・ジョーンズ (ds) と伝説のカルテットを結成し、『マイ・フェアリット・シングス』『至上の愛』などの不朽の名作を世に残す。66年7月に初来日。67年からはオーネット・コールマンと共演。同年2月の録音『エキスプレッション』がラスト・レコーディング、同年5月7日のボルチモアでの演奏がラスト・コンサートとなった。1967年7月17日、肝臓癌のためNY州デアパークの自宅近くのハンティントン病院で息を引き取った(享年40歳)。1992年、グラミー賞生涯功労賞が授与される。

## ジョン・コルトレーン唯一の Blue Note リーダー作品！



### Blue Train

#### John Coltrane

(EMIミュージック・ジャパン:TOCJ-66403)

John Coltrane (ts), Lee Morgan (tp), Curtis Fuller (tb), Kenny Drew (p), Paul Chambers (b), Philly Joe Jones (ds)

1. Blue Trane 2. Moments Notice 3. Locomotion
4. I'm Old Fashioned 5. Lazy Bird 6. Blue Trane (alt. take)
7. Lazy Bird (alt. take)

録音は1957年9月15日。このアルバムはコルトレーンがマイルス・デイビス・グループ在籍時の作品で、親分のマイルスが『死刑台のエレベーター』の録音のためにフランスへ行っている間に残した唯一のBlue Noteでのリーダー作。同じマイルス・グループのリズム隊、ポール・チェンパース (b) とフィリー・ジョー・ジョーンズ (ds) を従え、10ヶ月前に僅か18歳で同Blue Noteからリーダー作をリリースしたリー・モーガン (tp) とカーティス・フラー (tb) との3管編成によるフロント・ラインは賞賛を浴びた。また、晩年には異なる真のハード・バップ時代のケニー・ドリュー (p) の存在感も注目の作品。親分不在時のコルトレーンののびのびとした爽快感が堪らない！

## “シート・オブ・サウンド”を確立した金字塔の名盤



### Giant Steps

#### John Coltrane

(ワーナーミュージック・ジャパン:WPCR-25023)

John Coltrane (ts), Tommy Flanagan, Cedar Walton, Wynton Kelly (p), Paul Chambers (b), Jimmy Cobb, Lex Humphries, Art Taylor (ds)

1. Giant Steps 2. Cousin Mary 3. Countdown 4. Spiral
5. Syeeda's Song Flute 6. Naima 7. Mr. P.C. 8. Giant Steps (alt. take)
9. Naima (alt. take) 10. Like Sonny 11. Countdown (alt. take)
12. Cousin Mary (alt. take) 13. Syeeda's Song Flute (alt. take)

「敷き詰められた音」「音と音の間が隙間なく埋め尽くされた」という意味合いの“シート・オブ・サウンド”こそ、コルトレーン独自のスタイルであり、このアルバムでそのスタイルを確立させた。マイルス・デイビスのグループに参加した頃は下手クソ呼ばわりされるほどだったが、この作品を機に様々な誘惑や迷いを断ち切り、神懸かったように己のジャズ道に進進する晩年のコルトレーンへと直結する。1959年に録音されたアトランティック第2作目となった本作は、全曲コルトレーンのオリジナル。“シート・オブ・サウンド”の真髄は、タイトル曲の「ジャアント・ステップス」や「カウントダウン」などで聴ける！「ミスター・PC」は盟友ポール・チェンパース (b) へ捧げた名曲だ。

## 修行僧の美しい休息～女性にもお薦めの一枚



### Ballads

#### John Coltrane Quartet

(ユニバーサル:UCCU-9405)

John Coltrane (ts), McCoy Tyner (p), Reggie Workman, Jimmy Garrison (b), Elvin Jones (ds)

1. Say It (Over and Over Again) 2. You Don't Know What Love Is
3. Too Young to Go Steady 4. All Or Nothing At All
5. I Wish I Knew 6. What's New 7. It's Easy To Remember
8. Nancy (With The Laughing Face)

このアルバムが録音された1961~62年前後、コルトレーンはフリー・ジャズの手法を取り入れ、「神」「愛」「宇宙」といったよりスピリチュアルな表現を具現化しながら、ハードに無の境地でサクスを吹きまくるなど、修行僧の如くジャズに全精力を注ぎ込んでいた。そんな折、愛用していたマウスピースが破損し、代用のマウスピースの使用を余儀なくされる事に…。一時的にハードな演奏ができなくなったコルトレーンが、仕方なく吹き込んだのがこのアルバムであり、コルトレーン自身にとって不甲斐ない思いで奏でたバラードは、まさに怪我の功名といえる名演となり、彼自身のベストセラーとなってしまった。コルトレーンの優しく、歌心溢れる一面が垣間見える永遠の名作。

## コルトレーン・ファミリー

今年の1月12日、「ピアノ、オルガン、ハーブ奏者、作曲家としても活躍したジョン・コルトレーンの妻アリスが呼吸不全のため亡くなった(享年69歳)」というニュースが届いたが、結婚後の1966年7月にジョン・コルトレーン唯一の来日公演にバンド・メンバーとして一緒に羽田空港に降り立ったアリス。2人は4人の子供を授かったが、長男のジョン・コルトレーン Jr. は82年に10代の若さで交通事故で命を落としている。だが、最愛の妻アリス亡き後も、人一倍家族想いだったジョンの魂は残された3人の子供たち、次男でサクソ奏者のラヴィ、三男でサクソ・クラリネット奏者のオラン、長女でヴォーリストのミキが受け継いでいる。また、5人の孫たちも偉大な祖父母や親の影響を受けて将来ミュージシャンとして独り立ちするかもしれない。もし生きていれば81歳となるジョン・コルトレーン…。ジョンの魂と家族の絆は永遠だ。

## 映像で拝むジョン・コルトレーン

コルトレーンの映像作品を見るなら『コルトレーン・レガシー』(DLVC-1026)、『ジョン・コルトレーンの世界』(COBY-91247)、『シュプリム セッションズ』(COBY-91337)、『Live In '60, '61 & '65』(Import-JAZZ ICONS)などがお薦め！

## コルトレーンの愛車

1966年7月の来日時の記者会見の席で、「10年後のあなたはどんな人間でありたいと思いますか？」という質問に対して、「私は聖者になりたい」と答え、尊敬する人としてオーネット・コールマン、カルロス・サウセデン (ハーブ奏者) と共に、ノラ・ジョーンズの父親でもあるスタール奏者のラヴィ・ジャンカールの名を挙げたコルトレーン。その愛車は、意外にもイギリス製のスポーツ・カー「ジャガー・Eタイプ」だった。